

Event Guide

イベントガイド第4号

本紙では、地球一周の船旅がより充実したものとなるよう、おすすめの船内企画や旅に関するコラムなどを掲載したり、乗船者の皆さまを紹介する紙面です。日々の船内生活の充実にお役立てください。

この号では6月18日から6月30日までの情報についてお伝えします。

6月18日～6月25日 マスカレードマスクをつくろう

6月21日 レイキャビク

6月23日 沖縄デー

6月25日 クルージングパーティー

6月27日 芸達者祭

6月29日～30日 ニューヨーク

イベント紹介

●6月23日 沖縄デー

6月23日は、沖縄県が定めた沖縄戦犠牲者への哀悼の意と世界平和を願う「慰霊の日」です。船内では、過去の歴史や沖縄を取り巻く課題について考えたり、観光名所の紹介、エイサーやバンドメンバーによるパフォーマンスステージなど、沖縄に関するさまざまな企画をおこないます。

●6月25日 クルージングパーティー

イタリア発祥のマスカレードパーティーを実施します。伴いまして、18日からマスカレードマスク作りワークショップをおこないます。この旅で自分だけの特別なマスクを作って参加してみませんか？

※マスク作りは有料になります。

●6月27日 芸達者祭

皆さん自身が自慢の特技や芸を披露し合い、観客と共に楽しい時間を過ごすイベントです。

プログラムディレクター 鈴木隆之

音楽で繋がる世代を超えた記憶



ヒロシマ・ナガサキには「被爆楽器」として、持ち主が亡くなった後も音色とともに当時の記憶を繋いでいる楽器があります。今回のVoyage120ではベルゲンからニューヨークの区間で「パルチコフさんの被爆バイオリン」と呼ばれる楽器が船に合流します。このバイオリンは1893年生まれのSergei Palchikoff(セルゲイ・パルチコフ)さんが愛用していたものです。1922年にロシア革命を逃れるために日本に亡命したパルチコフさんは、のちに広島女学院で音楽教師として赴任します。

そんなバイオリンとピースボートは2019年の夏に出会います。原爆投下から70年以上が経ち、自らの体験を語りながら旅のできるヒバクシャは本当に少なく、今後どのように想いを伝えていくべきかを模索していた最中でした。「音楽は当時の景色や時代を想像するという継承の手助けをしてくれる」ということに気づきます。

バイオリンとともに、同じく被爆遺品であるピアノにも出会います。それはパルチコフさんが勤めていた広島女学院に在籍していた河本明子(かわもとあきこ)さんが使用していたピアノで、2つの楽器をお借りして寄港地や船内にて「平和のコンサート」を実施しました。

今クルーズでもコンサートを行うほか、バイオリンとともにパルチコフさんの孫であるDrago Anthony(ドレイゴ・アントニー)さんも乗船し、祖父であるパルチコフさんのエピソードや、自身が祖父や母親から聞いた被爆の話などをしていただきます。

TIME FOR PEACE担当 橋本 舞

白夜と北極圏の空～時間を忘れる光の魔法～

かつてピースボートで北極圏を訪れた時、最も心に残ったのは真夜中でも太陽がほぼ沈まない「白夜」の不思議な体験でした。今クルーズでも皆さんにぜひ味わってほしいこの神秘的な光の世界について、私なりの楽しみ方をご紹介します。

①撮影のコツ

曇り空の夕暮れ時は、灰色と金色が混ざり合ったモノクロームの世界が広がります。撮影のコツは時計と一緒に写すこと。深夜であることが一目でわかる思い出深い写真になります。



②夏でも冷え込む北極圏

フリースやウィンドブレーカーを着て、手袋やネックウォーマーもあると快適。デッキで長く過ごすなら、温かい飲み物をタンブラーなどに入れて持参するのがおすすめです。体が冷えたらすぐに船内で温まりましょう。

③ケープタウン～テネリフェ間に乗船されていた、水先案内人で天文の専門家の小関高明さんから楽しむアイデアを1ついただきました。『例えばカメラを用意して撮影角度と、目印を決めて1時間ごとに白夜を撮り続けると、ユニークな構図になって面白いかもしれませんね。』

白夜の光は体内時計を乱すこともあります。まさに「時計を見ず、自然のリズムに身を任せる」のが北極圏流の過ごし方です。この非日常的な時間感覚こそ、地球一周の船旅ならではの貴重な体験です。この光の魔法にかけられる日を楽しみにしていきましょう。

メディアディレクター 磯部弥一良

海からの便り

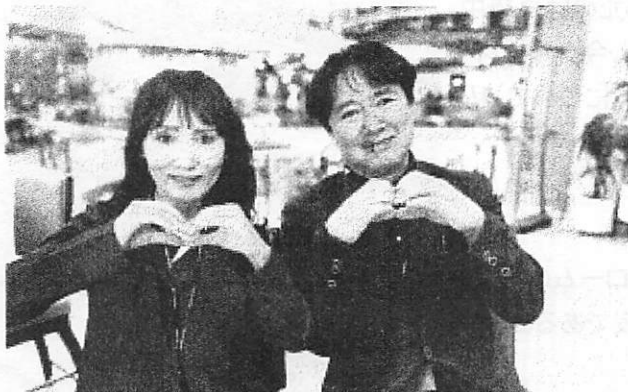
気が付けば出航して2か月が経ち、旅も折り返しになりました。壮大な南半球の自然や歴史あるヨーロッパの街並みなど、たくさんの景色をご覧になったり、船内でもカルチャースクールや自主企画で続けてきた練習の成果を実感されてきた頃ではないでしょうか。

ところで、船から手紙を出せることはご存じですか？この旅でどんな出会いがあったのか、どんなことを経験したのかご家族や友人に送る方や、自分の日記のように感情を綴り、帰国後の楽しみに自分宛てに送る方もおられます。

レセプションやショップで専用のシールを購入し、各寄港地の締め切り時間までにレセプションのポストに投函するだけです。詳しくはダイレクトリーをご覧ください。海外の郵便事情により以前、手紙よりも先にご本人が先に帰国されたということもありましたので、いつ頃届くかはのんびりお待ちいただいた方がよいかもしれません。

イベントガイド担当 武田詩歩

参加者紹介



今回の参加者インタビューは、韓国からご夫婦でご乗船されている金容信さん(右:キムヨンソン)と朴善亮さん(左:パクソンリャン)です。

<どちらから来られましたか?>

韓国の麗水(ヨス)からです。

<ピースボートに乗船しようと思ったきっかけは?>

35年間働いていて、退職して自分がここまで頑張ってきたご褒美に乗船することに決めました。飛行機があまり好きではないので、船旅を選びましたが想像していたよりもとても良いです。

<1か月間乗ってみた感想は?>

ゲストサービスの方が船酔いのツボを教えてくれたり、レセプションの方がいつも笑顔で親切に対応してくれて感謝しています。5階のインターナショナルカフェでビスケットやコーヒーを飲みながらフルーツやクラシックの演奏を聴いたり、スポーツジムにもほぼ毎日行ったり、ゆったり本を読んだり、自分達の時間を過ごせています。

<Voyage120を選んだきっかけはありますか?>

地中海やサントリーニ島へ行きたくてこのクルーズを選びましたが、航路変更になり悩みましたが、アフリカにいつまた行けるかも分からないので乗船することにしました。実際に行ってみてショッピングも楽しかったし、喜望峰の風景が素晴らしくて、こういうのが神様が作った景色なんだと思いました。素晴らしい景色の中でなぜ戦争をしているのかと疑問に思います。ピースボートの核廃絶の講演もすごく賛同しています。

<船内でやってみたいことはありますか?>

合唱団の指揮者をしていたので、もし機会があれば自主企画で合唱団を指揮してみたいですね。伴奏してくれる方がいたら、勇気をだしてやってみたいです。

<最後にメッセージをどうぞ>

とにかく健康に注意していただきたいです。皆さん、幸せそうに過ごされており嬉しく思います。船で出会ったみなさんも優しく、いつも笑顔で気にかけてくれているのを実感します。機会があれば次回は地中海を回るコースに乗船したいです。